

## 岩見護先生を憶う

福原 一來

冬休の直前たしか十二月十三日金曜の午後三時頃であつた。私が教員室に入ると岩見先生はただ一人授業の始まるのを待つて居られた。あの元氣のよい明るい風格の先生がその日は言葉少なく、苦痛をじつと忍んで居られるように見受けたので、無理をせず休講にして歸られてはどうかと勧めたところが、今日は最後の授業でもあり、やはり一度教室に出ないと氣がすまぬからというて教員室を出て行かれた。私も同じ時間に授業があつたので、その時廊下で見送つたのが遂に最後の別れとなつた。

一月八日、膀胱癌と診断されて京大病院に入院され、手術後快方に向うことなく、卒然として三十日長逝された。少康を待つて是非もう一度御逢いしたいと念じて居たにも拘らず、遂にその時を迎えることができなかつた。私が岩見先生に親しく接するようになったのはそれほど古いことではない。大正七・八年頃私が谷大へ入學した當時、先生は事務室に勤めて居られた。しかしその時のことは頑健そのもののようなあゝ體質から受けた印象以外には餘り残つて居ない。昭和五年、私が海外から歸り、山邊習學先生のひきいる文化教會に出入するようになってから、時々講演を聞き、また直接談合する機會を得るよう

になつた。他の追隨を許さぬ教養の廣さと深さ、人を魅了せずにはおかぬゆたかな詞藻、全身に漲り溢れて居た信念と誠意とは、何時もわれらを温かい光をもつて包み、道に志す者を啓導せずにはおかなかつた。

岩見先生は教室に於てまた法座に於て非常に嚴格であつたと聞いている。學問に求法に心身を投げこんで來られた人としては、ふまじめな、生ぬるい、無關心な態度を許すことができなかったに相違ない。病軀をおして最後まで授業を續けられたあの眞摯一貫の態度こそは、何よりも先生生涯の眞面目を躍如たらしめているであらう。かくの如く先生は實に眞摯一貫の道を辿られた人であつたが、しかし、まじめな人には有りがちな固陋とか偏狹とかいう型の性格とは全く對照的な、實に物分りのよい、一切を好悪なくそのままに同感して容れ得る温かい雅量ある人であつた。昭和十七年、京都府立第三中學校教諭を辭めて、東本願寺教化研究院長として赴任された。當時は戦前の日本精神なおはなやかな時代で、教化の基本方針に於ても王法爲本の問題が新らしく取り上げられて來て居た。その頃、今は亡くなつた藤井碩舎師や、現在學生部長の武生讓先生などと毎日朝から論議に花を咲かせて居た。今から思えばみなとりとめのない茶話に終つているわけであるが、その二、三年の間に岩見先生から一度も注意や叱言を受けたことがない。先生は何時も原稿や手紙を書きながらわれらの談論にも耳を傾け、時にはその通りだと呼應して、筆を擱きわれらの仲間に入つて來られた。少しの距りもわだかまりもなく、魂と魂との觸れ合う共同研究の座が續けられたことは、温かい包容力に富んだ院長

の徳性の然らしめたことであると、今でも感謝して居る。私から先生の人格に傾倒し親近し出したのは此頃からである。

當時、私は世に有りがちな世間苦に惱亂されて、わが魂の置き所に困惑して居た。自分の求めて止まないものは高遠な眞理でも道徳的な教訓でもなく、全く安定を失つて居るわが魂の安息であつた。そんな所から研究院に於ける談論の間にも何物かなお物足りなさを感じ、等持院の御自宅を訪問して、先生愛好の茶の間に時を忘れて御邪魔することが多かつた。それらの時自分が何を訴え語つたかその記憶は明らかでないが、心底に残る深い感銘は、わが言の一切を濫かく受け容れて、終始徹底的に聞き手となつてくれたことである。先輩に苦惱を訴えた多くの場合、そんな経験は自分も度々したことがあるとか、君の考えは少し間違つて居るとか、ただ批判と説法に終ることが多い。ところが岩見先生からは一度も御自身の苦心談や體驗談を不思議にも聞いたことがない。ただそうか、そうか、君の氣持はよくわかるとだけ相槌を打つて、最後まで慈顔溢れるばかりに耳を傾けて下さつた。人生の苦惱はある意味に於ては根據のない苦惱である。世間の條理をわきまえることも必要であるが、その道理をよく知りながら如何ともし難いわが身に底知れぬ不合理な惱みがある。一言も道理を説かず、ただ相手の苦惱に同感して終始聞き手となつて下さつたことが、苦惱をそのままにして私を救う白道となつた。

昭和二十年頃、教化研究院の職を辭し谷大教授として來任された。その頃からの先生は教壇に立つ傍ら全國に散在する法友の請をも斥け難く、餘暇を以て廣く教化に挺身されたので、恐

らくその過勞が健康を害する原因となつたのであろう。また病軀をも鞭打つて責任を果し續けられた氣力と誠意とが病勢を一層悪化することとなつたに相違ない。長壽を保つことが必ずしも人生の本懐ではない。勞苦を意に介せず死に至るまで勤精進せられた先生には悔を残すことは何一つなかつたであらう。しかし愈々奥ゆかしく、比類に磨きのかかつた法器を今日失つたことは、宗門のためは固より、多くの法友のひとしく悼み悲しむところとなつてゐるであらう。

### 岩見護先生略年譜

明治二十六年 (一八九三) 一 歳

十二月五日、石川縣鳳至郡河原田村字熊野千部九十三番地廣專寺に生まる。

明治四十五年 (一九一三) 十八 歳

七月、眞宗京都中學を卒業。

大正二年 (一九一三) 十九 歳

大谷大學書記に任せらる。

大正四年 (一九一五) 二十一 歳

大谷大學書記の任を退く。

大正六年 (一九一七) 二十三 歳

再び大谷大學書記に任せらる。

大正八年 (一九一九) 二十五 歳

大谷大學書記の任を退く。

大正十年 (一九二二) 二十七歳

七月、教師の學階を授與せらる。

大正十二年 (一九二三) 二十九歳

八月、高倉會館主事を命ぜらる。

大正十三年 (一九二四) 三十歳

七月、試験檢定により中等學校國語科教員免許を受く。

九月、高倉會館主事の職を退く。

十月、京都府立京都第三中學校教諭に任ぜらる。

大正十五年 (一九二六) 三十二歳

一月、試験檢定により中等學校漢文科教員免許を受く。

昭和十一年 (一九三六) 四十二歳

二月、『信と生活』(法藏館)を出版。

昭和十三年 (一九三八) 四十四歳

六月、『日本諸高僧の面影』(法藏館)を出版。

昭和十四年 (一九三九) 四十五歳

一月、『もののはれ』(一生堂)を出版。

昭和十五年 (一九四〇) 四十六歳

十二月、『續信と生活』(法藏館)を出版。

昭和十七年 (一九四二) 四十八歳

四月、京都府立京都第三中學校教諭の職を退く。

五月、教化研究院院長に任ぜらる。

昭和十八年 (一九四三) 四十九歳

五月、『日本藝道のこころ』(文進堂)を出版。

七月、擬講の學階を授與せらる。

昭和十九年 (一九四四) 五十歳

六月、權大僧都に補せらる。

昭和二十年 (一九四五) 五十一歳

四月、教化研究院院長の職を退く。

五月、大谷教學研究所囑託となる。

十月、大谷大學専門部教授を囑託せらる。

昭和二十一年 (一九四六) 五十二歳

三月、大谷教學研究所囑託を解かる。

五月、大谷大學専門部教授に任ぜらる。

九月、『芭蕉の旅心』(永田文昌堂)を出版。

十一月、紀行と隨筆集『山河大地』(永田文昌堂)を出版。

昭和二十二年 (一九四七) 五十三歳

四月、大谷大學學部講師を委囑せらる。

昭和二十四年 (一九四九) 五十五歳

三月、『蓮如上人の文學』(大谷學報二八ノ二)を發表。

四月、『蓮如上人』(涉成苑)を出版。

六月、『我聽く』(永田文昌堂)を出版。

十二月、大僧都に補せらる。

昭和二十六年 (一九五二) 五十七歳

四月、學制改革により舊任自然解消、改めて大谷大學專任講師及び同短期大學部講師を委囑せらる。

八月、『念佛者のおもかげ』(永田文昌堂)を出版。

昭和二十七年 (一九五三) 五十八歳

二月、『眞の幸福』(眞宗典籍刊行會)を出版。

三月、『荒海やの句について』(國文學會報五)を發表。

五月、「芭蕉文學の奥底にあるもの」(大谷學報三一ノ三)を發表。

昭和二十八年 (一九五三) 五十九歳

四月、大谷大學短期大學部教授に任ぜらる。

五月、「世阿彌と源氏物語」(國文學會報六)を發表。

同月、『動中靜語』(伊藤萬株式會社)を出版。

九月、『佛を拜む手』(百華苑)を出版。

昭和二十九年 (一九五四) 六十歳

二月、「芭蕉塚ノート」(國文學會報七)を發表。

七月、『光に遇う』(永田文昌堂)を出版。

十月、「謠曲にあらはれた佛教思想」(大谷大學研究年報七)を發表。

昭和三十年 (一九五五) 六十一歳

六月、「謠曲にあらわれた地獄」(大谷學報三五ノ一)を發表。

十一月、昭和二十一年以後、雜誌(教化・全人・懸葵・烏楳・俳道など)に發表した紀行・隨筆に、未發表のものを加えて『山雲抄』

(永田文昌堂)を出版。

昭和三十一年 (一九五六) 六十二歳

四月、『赤尾の道宗』(永田文昌堂)及び『御傳鈔講話』(大谷出版社)を出版。

同月、「芭蕉塚ノート續稿」(國文學會報九)を發表。

昭和三十三年 (一九五七) 六十三歳

五月、「白峰」(國文學會報一〇)を發表。

六月、「物狂の能について」(大谷學報三七ノ一)を發表。

昭和三十三年 (一九五八) 六十四歳

一月二十九日、權僧正に補せらる。

一月三十日、京都大學附屬病院にて長逝。院號法名「閑古院釋正護」下附せらる。

二月二日、京都市北區等持院東町十五番地の自宅で葬儀。

同月、「大雪山と支笏湖」(國文學會報一)が發表さる。

四月、遺稿集『人生の彼岸』(永田文昌堂)及び『日本藝道と佛教のこころ』(永田文昌堂)、『日本藝道のこころ』の増補版)出版さる。